



- 1・4 札幌学院大生が、栗山町で子育てボランティア。
- 2 4大学の学生が、栗山ウィンターフェスでヒーローショーに出演。子どもたちに大人気でした。
- 3 酪農学園大生が大森銀座商店街のイベント「ブックストリート」で、古本販売のお手伝い。
- 5 北翔大と札幌学院大の学生が、EBRI (エブリ)にチョコレートを作成。巨大なサンタがクリスマスを彩りました。



輝け★学生パワー

若い力でまちを元気に!

江別は、約1万人の大学生が集う「学生のまち」。
 しかし、多くの学生は卒業後に江別を離れてしまいます。
 "まちを好きになってほしい" "住み続けて欲しい"と、
 市内4大学と8市町が連携して、学生を地域のイベントなどに受け入れる「学生地域定着事業」を昨年から始めました。
 これまで※63プログラムに、延べ830人の学生が参加し、
 地域の人と出会い、まちを盛り上げています。

※平成28年2月から平成29年1月末まで

大学生を地域へ「学生地域定着事業」



市内4大学の学生は、「学生地域定着推進広域連携協議会」(市内4大学と関係団体、8つの市町で構成)から紹介を受けて、各地域の祭りやイベントなどに参加しています。

学生、地域に 飛び出す



地域へ飛び出し、学ぶ学生たち。地域の人のつながりは、将来につながる、貴重な経験です。参加した学生に話を聞きました。



1・3_南幌町のワークショップ。参加した住民とまちづくりのアイデアをまとめ、発表しました。



2_学生が郷土資料館で江別未来創造フォーラムのゲストに、江別の歴史を紹介。江別式土器などを説明しました。



4_2日間かけて、芦別市を学びました。写真は観光スポットの「旭ヶ丘公園 サル山」。

地域活動の楽しさを知り 将来の夢を決めた

「将来はまちづくりに携わり、北海道を盛り上げたい」酪農学園大学に通う遠藤千尋さん(21歳)は笑顔で話します。遠藤さんは、昨年夏から学生地域定着事業のプログラムに参加したことがきっかけで、4月からは、札幌学院大学大学院でまちづくりを学ぶことに決めました。将来は、まちづくりイベントの主催者や司会者になりたいと話します。

もともとまちづくりに興味があったという遠藤さんは、大学の講義で配られた「学生地域定着事業」のチラシを見て申し込みました。

最初のイベントは芦別市のまちづくりに学生目線で提言すること。芦別市内の農家や観光施設を回り、地域の特徴や取り組みを学んだ後、体験型観光ツアーへのアイデアを発表しました。

「地域の人の活動がとても楽しかった」という遠藤さんは、続いて南幌町の総合計画へ意見するまちづく

りワークショップに参加。まちの子育て支援や情報発信の仕方などにアイデアを出し、住民を交えての話し合いにやりがいを感じたと言います。

初めて江別を知った

江別市内の活動では、昨年10月に江別青年会議所が主催した「江別未来創造フォーラム」の企画・運営に参加。一日かけて江別について勉強し、フォーラムのゲストに、郷土資料館などで江別の歴史を説明しました。

奈井江町出身の遠藤さんは、この時に初めて江別を詳しく知ったそうです。「入学からずっと住んでいたのに、れんがなどの特産品も知りませんでした。江別をもっと知るために、これからまちを見て回りたい」と話し、江別の歴史や文化を知り、地域の人と関わったことで、今まで以上に江別への愛着を持ったそうです。

つながりを大事にしたい

「芦別で知り会った農家さんに呼ばれ、先日餅つきに参加しました。プログラムが終わった後でも、地域の人と交流ができてすごく嬉しい」と、これからも地域とのつながりを大事にしたいと話します。



酪農学園大学4年
遠藤 千尋さん(21)

学生が育ち 地域も育つ



学生の力は、地域に
活気と笑顔を与えます。
祭りを主催する地域のひと
市内企業の方に話を聞きました。



1_ えべつ北海鳴子まつりで、江別青年会議所の会員と焼き鳥を焼く学生たち（中央2人）。お互いに勉強や仕事内容を聞くなど、世間話も弾みました。

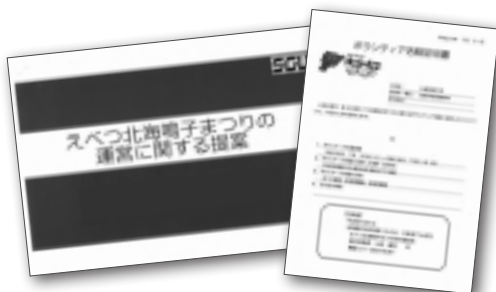
2・3_ 札幌学院大学の学生たちが、ステージで出店をPR。メニューを紹介した看板は手作り。若い学生の登場で、観客から注目を集めました。

学生の笑顔が祭りの活気に

「楽しそうな学生がいると、人は自然と寄ってきます。彼らの笑顔は、祭りの活気を生み出していますよ」毎年7月に野幌地区で開催される、えべつ北海鳴子まつり。全道のYOSAKOIソーランチームが集まり、夜まで華やかな踊りが披露されます。この祭りの実行委員長を務める山保義和さん（42歳）は、4年前からこの祭りに学生ボランティアを受け入れています。

一生懸命取り組む姿に刺激

もともと札幌学院大学経営学科の学生を、実践授業の一環として受け



左 / 札幌学院大学の学生が作った提案書。SNSでの情報発信など、祭り発展のアイデアが詰まっています。右 / 学生に渡すボランティア活動証明書。就職活動などで、地域活動をPRするのに役立っているそうです。



えべつ北海鳴子まつり
実行委員長
有限会社やまほでん
き代表取締役
山保 義和さん(42)

入れたのがきっかけ。「楽しい」「勉強になる」と学生に好評で、運営の助けにもなったことから、毎年受け入れることにしました。

昨年は、学生11人が鳴子まつりに参加。学生たちは、2日間、出店の焼き鳥販売や会場設営などで活躍しました。「仕事を任せると、自ら考えて工夫し、一生懸命手伝わってくれます。焼き鳥の売り上げを伸ばそうと売り子になって練り歩いてみたり、ネットを使って情報発信したりね。行動力と発想力に刺激を受けました」と山保さんは振り返ります。

若い担い手を期待

世代交代などが課題でもある地域の祭りですが、山保さんは学生の力に期待を寄せます。「市外に就職しても、まちを好きになってもらえれば、お手伝いや遊びに来てくれる人もいるでしょう。そうすれば、祭り継続の力になるし、まち全体の発展にもつながります」。

学生×地域

お互いにメリット 広がる可能性

学生との連絡調整や現地への同行など、地域と学生をつなぐ2人に話を聞きました。



学生地域定着事業 業務委託先
NPO 法人えべつ協働ねっとわーく

事務局長 理事
成田 裕之さん (42) 橋本 正彦さん (39)

橋本さん 「受け入れる地域と参加する学生、双方にメリットがある」これがこの事業の特徴であり、肝だと思えます。世代を超えて企画し、運営することは学生にとって大きな経験になります。また、若い人の力は、高齢化の進む地域に刺激と活気を与え、まちの未来も明るくします。この事業を入口に、地域と学生が繋がってほしいですね。

成田さん 「地域で活動してみたい」と考えている学生は、実は多いのです。この事業はそのニーズをすくいあげ、地域の活性化につなげる重要な役割を持ちます。参加した学生の中には、将来の夢を「まちづくり」と決めた人や、自ら企画して地域活動を始めた人もいます。一方で、地域の人と学生で興味や関心が食い違うなど、マッチングの課題もあります。これらを改善していけば「地域×学生」の可能性はこれらからどんどん広がっていくと思います。

地域で市内学生を受け入れてみませんか？

「イベントなどを学生と協力して作ってみたい」、「大学生のアイデアが欲しい」などのご相談はこちらへ！

えべつ協働ねっとわーく ☎ 374-1460
企画課大学連携担当 ☎ 381-1015

活動の様子は
「学生地域定着推進広域連携協議会」
ホームページ、フェイスブックへ

学生地域定着

検索

★輝け★学生パワー

若い力でまちを元気に！



1_ 江別未来創造フォーラムは、無事成功。当日も学生は裏方で活躍しました。

2_ 江別青年会議所と北海道情報大学の学生が共同企画したスノーフェスティバルの「ソリ競争」。子どもたちに大人気でした。

地域貢献のやりがいを伝える

「地域のために一緒に頑張れる仲間を増やしたい」と熱く話すのは建設業の(株)石川組に勤務し、江別青年会議所の副理事長を務める深瀬聡さん(38歳)。深瀬さんは、同会議所主催イベントに、積極的に学生を呼び込み、地域を盛り上げようと尽力しています。

夏祭り「まるごと江別」では、学生用にボランティアプログラムを作ったほか、「江別未来創造フォーラム」と「スノーフェスティバル」では、企画から学生に参加してもらい、学



株式会社石川組
江別青年会議所副理事長
深瀬 聡 さん (38)

生のアイデアを反映しました。

「まちづくりには、若い人の意見も大事です。学生が地域に参加できる場を増やし、やりがいを感じてほしい」と深瀬さん。地域活動への参加によって、学生が江別に愛着を持ち、定住につながることを期待しています。

地元企業に目を向けてもらう

また、地元企業の立場としても学生との関わりを大切にしています。2月からは、(株)石川組で大学生を受け入れ、職場体験をもらうラインナップも行っています。深瀬さんは、「地元企業では、少しずつ事業の担い手が減っています。地域活動を通して、学生が地域を支える企業に、目を向けるきっかけになってもらえれば嬉しい」と話します。